国語科自由進度学習における教師の伴走

～内発的動機付けを持続させる支援～

全国小学校国語研究所・全国研究協力委員　斎藤　照代

１　ナゴヤ・スクール・イノベーション

名古屋市は、子ども主体の授業改善を通して公立学校の授業や教育のあり方を変革しようと教育委員会が主導して本事業を立ち上げ、子ども一人一人の興味・関心や能力、進度に応じた「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を推進している。施策に掲げられた「画一的な一斉授業からの脱却」という言葉は、一般の学校の教師にとって衝撃的で不安や懸念もある。しかし、市民や教員との対話の機会も作り全市的な規模で展開する教育改革の理念は、トライ＆エラーを繰り返しながら少しずつ浸透していくと考える。（詳しくは「学校は誰のもの？～子ども主役の学校へ、いま名古屋から～」著者：名古屋市教育委員会、編者：中谷素之、松山清美、東洋館出版社、2024 年を参照されたい。）

２　内発的動機付け

一斉授業から脱却して子ども主体の授業を展開するために教師はどのような支援をしていくとよいのだろうか。この課題について十分な見識がないまま PBL や自由進度学習を行えば、活動主義の批判を受けることになってしまうだろう。子ども主体の学習を展開するためには内発的な動機付けが必要である。デシ（Deci,E.L）は、自己決定感と有用感が高められれば内発的動機付けが増大するとしている。さらに自己中心性ではなく関係性の欲求も指摘している。つまり、「自律性」「有用感」「関係性」が内発的動機付けを高める要素であるということである。このことから PBL や自由進度学習において教師が留意したい点を整理してみたい。

◇自律性のある学び

学びのコントロールを児童自身が行うことができるようにするということである。目標設定、計画、学習方策のセレクト、計画の修正など自律的に行うことができるようにする。「何がしたいのか(will)」「何ができるのか(can)」「どんな力が必要か(must)」を自分で考え選択するという意識を児童にもたせつつ、教師は体系的な学び、価値ある学びになるように伴走していくというマインドセットが必要である。

◇自己有用感がもてる学び

既習事項や自分の認知の状態に気付かせ、必要となる知識や技能を自ら求めるようにすることが大切である。そして、それを獲得するための学習方策やモデルを示すことで自力解決の見通しをもたせたい。節目ごとに学びを俯瞰してその価値や意味について考えられるようにすると自己効力感や有用感を味わわせることができる。さらに、学びの過程における教師からのフィードバックや励ましも効果的である。

◇関係性のある学び

自由進度学習においても他者との関係性は重視したい。他者の学びがモデリングとなって影響を受けたり、協働して新たな認識をもったりできる。他者からのフィードバックは自己概念の形成につながる。

３　国語科自由進度学習

書くことの指導は自由進度学習に適していると言える。個々の技能や内容、書き方によって進度に差が生じるからである。以下に全小国名古屋大会で授業者を務めた舟橋宏紀教諭(現在、中島小学校勤務)が小学校３年生の報告文の指導で自由進度学習を取り入れた実践を紹介する。学習のゴールに向けて内発的動機付けを喚起し、学びの内容や方策をメタ認知モニタリングさせている点で興味深い実践である。

4　指導の実際（令和４年度 10 月実践　名古屋市立大宝小学校 教諭 舟橋 宏紀 第３学年 28 名）

⑴　単元名　取材したことを知らせよう（教育出版）

⑵　目標

○　取材を通して分かったことについて、伝えたいことを明確にして構成を工夫し、学習の見通しをもって、粘り強く報告文を書くことができる。

⑶　単元について

本単元では、スーパーマーケットについて取材したことを報告文にまとめる学習を行う。報告する相手を保護者とし､取材を通して分かった事実やそれを基に考えたことを文章に書いて伝えることを、単元のゴール（ミッション）として設定する。報告文は、小学３年の児童にとって初めて書くことに取り組む文種である。どのような文章を書けばよいのかなどの学習の見通しをもたせながら、主体的に学習に取り組むことができるようにしていく。

⑷　学習の流れ（全９時間）

時	1	2・3	スーパーマーケット見学	4	5・6・7・8	9
内容	単元全体の学習の見通しをもつ	知りたいことをまとめ、取材メモをつくり、調べる		報告文に書く内容を選び、構成を考える	報告文を書く・読み返す（単元内自由進度学習）	単元全体の学習を振り返る

⑸　実践の手だて

手だて１　単元全体の学習の見通しがもてるようにする授業の工夫（第１時）

第１時では、「学習内容（何を学ぶのか)」、「到達目標（何ができているとよいか)」、「学習の進め方（どのように学習を進めるのか)」の三点について知ったり考えたりすることのできる学習活動を位置付ける。

まず初めに、単元を通したミッションを提示し、そのクリアのためには何をすべきか、これまでの学習で経験してきた、「書くこと」の学習過程を想起して考えさせ、本単元の学習はこれまでの学習と何が違うのかが明確になるようにする。また、報告文のモデル文を提示し、作文との違いについて検討することで、完成を目指す報告文のイメージを具体的にもつことができるようにする。

授業の後半では、「学習の進め方」について考える時間を設定し、学習支援アプリ「ロイロノート・スクール」（以下、ロイロノート）を活用し、報告文の完成までにどのような過程で学習を進めるのかを計画する活動を取り入れる。

手だて２　見通しをもって学習を進められるようにする工夫（振り返り）

児童が単元のゴールを常に意識して学習を進められるよう、毎時の振り返りの観点を「ミッションがクリアできそうか」と設定する。振り返りシートに、「クリアできそう・できなさそう」から選択させ、その理由を記述させることで、学習の調整を促すとともに、児童が記述した内容に応じて、個別に支援を行ったり、学級全体での指導内容に反映させたりしていく。

⑹　授業の様子

第１時：単元全体の学習の見通しをもつ

①「学習内容」と「到達目標」を知る

授業の冒頭で、本単元のミッションを提示し、そのクリアのためには何に取り組むとよいかを考えさせた。児童からは、次のような意見が挙がった。

【ミッション】
お家の人に向けて、スーパーマーケットへ行って、実際に見たり聞いたりして分かった本当のことをまとめた文章を書く。

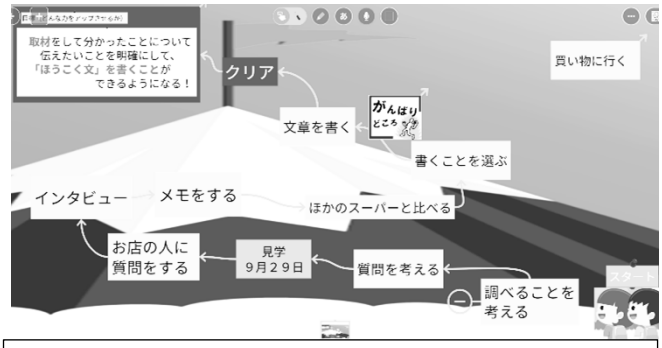
【クリアのために何に取り組むとよいか】
・事典やインターネットで調べる　・見学に行く
・ほかのスーパーと比べる　・買い物に行く
・質問を考える　・調べることを考える
・インタビューをする　・メモをする　・文章を書く

これまでの学習を基に、取材までの段階に関わる内容は、思い付くことができていた。一方で、記述に関わる内容は、「文章を書く」という意見以外、挙がらなかった。「どのような文章を書いたらよいのかが分からない」という児童の発言に応じて、報告文のモデル文を示す場面へと移った。

まず、初めてスーパーマーケットに行った体験をまとめた作文（教師自作）を提示した後、過去に上級生が記述した報告文を提示することで、作文と報告文とでは何が違うのかを比較させた。児童は、「最初に目的が書かれている」、「箇条書きの部分もある」など、報告文の大まかな特長をつかむとともに、どれくらいの文章を書けばよいかという、到達目標を確かめることができていた。

②「学習の進め方」を考える

ロイロノートを活用し、授業の前半で児童から挙がっていた、ミッションのクリアに向けて取り組むことの意見を、それぞれカード化して配付した。そして、どのような順序で学習を進めたいかを考え、登山のルートを模した「山登りミッションシート」（資料１）にカードを並べ、つなぐ活動を行った。



資料１　第１時終了時の「山登りミッションシート」

児童からは、「自分はやらないと思ったら、カードをつながなくてもよいですか。」（実行するかどうかの検討）や「このカードを複製してもよいですか。」（同じ活動を繰り返す可能性があるかの検討）などといった質問があり、学習の進め方を具体的に考える姿が見られた。

この学習の進め方の計画を立てる場面で、児童に「どの段階が難しそうか」を問い、このミッションの難所となる学習過程を想像させた。店員へのインタビューをメモすることが難しそうといったように、取材段階が難しそうだと回答する児童がいた一方で、多くの児童が「書くことを選び、文章を書く段階」が難しそうだと回答した。そこで、学級の児童が「難しそう」という見通しをもった段階を、ミッションのクリアを目指す上での学級全体の「頑張りどころ」にしようと呼び掛け、粘り強く学習に取り組むことが必要になる段階であることを確認した。

振り返りの場面では、本単元では「ミッションがクリアできそうか」という観点で振り返りを行い、毎時の自分の学習から判断し、その理由を記述していくことを伝えた。第１時で「クリアできなさそう」を選択した児童の理由には、「たくさん情報を集め過ぎて書くことを選ぶのに困りそうだから。」、「文章を書く段階に時間が掛かりそう。」など、自分のこれまでの学習経験と本単元の学習を結び付けながら、見通しをもつことができている記述が見られた。

第５時～第８時：報告文を書く・読み返す（単元内自由進度学習）

スーパーマーケットでの取材を終え、報告文の構成や内容の検討、記述を行う段階へと移ると、「ついに頑張りどころが来た。」と発言をする児童の様子や振り返りでの記述が見られ、第１時から見通しをもって学習を進めてきたことを実感する様子が見られた。

児童は、報告文の完成までの過程をスモールステップで示した学習の手引きや、報告文のモデル文、推敲のポイントを示したチェックリストなど、教室内やロイロノートの「資料箱」に準備された資料やデータを、随時、各自の学習状況に合わせて自由に活用しながら記述を進めた。下書きはタブレット端末上で文章の修正を行いながら進め、清書は手書きで行う児童、第１時に視聴した報告文のモデル文の音声を聞き直しながら文章を考える児童、見学時に記述したメモや撮影した動画を友達と共有し、相談しながら書き進める児童など、それぞれの学習の進め方で報告文を書く、多様な学びの姿が見られた。

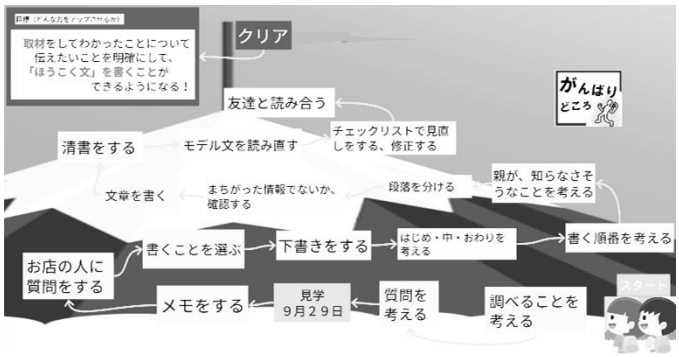
以下は、第２時以降の振り返りで、「クリアできなさそう」の回答に見られた主な理由と、それに応じて行った指導・支援の内容である。

時	段階	「できなさそう」の理由	指導・支援
2	取材前	インタビューで、店の人の話を聞き逃さずに、メモをできる自信がない。	・第３時や朝の帯の時間で、メモの学習を実施する。 ・役割を分担し、タブレットでのビデオ撮影を認める。 （相手の許可を得ることを指導する。）
3		メモをするとき、長い文章になってしまい、文章を書くときに困りそう。	・キーワードだけ書けるように、カード型で枠を示したメモ用紙を準備し、必要な児童に活用を促す。
4	取材後	スーパーマーケットの見学で、必要な情報が集められなかった。	・学級全員で、記述したメモや、見学時に撮影した写真や動画を、ロイロノートで共有する。疑問の解決につながる情報はないか、閲覧を促す。
5	報告文の記述・推敲	取材メモを、どのように文章にしたらよいかが分からない。	・メモの内容が報告文の中でどのように活用されているかを示したプリントを準備し、個別に助言を行う。
		「分かったこと」について、どの順序で項目を立てて書くとよいか迷っている。	・第６時の初めに全体で指導する時間を設ける。 ・ロイロノートで文章の複製を行い、項目の順序を入れ替えて、伝わり方を比較・検討することを促す。
6		友達に読んでもらって推敲を進めたいが、みんなが真剣に書いていて、声が掛けづらかった。	・推敲のポイントを示したチェックリストを準備する。 ・同程度の進捗状況の児童を紹介し、次時の初めにチェックリストを基にアドバイスし合えるようにする。
7		残りの時間内では、書き終えられない。	・チェックリストの内容を先に確認させ、その内容に気を付けながら記述を進めるように助言する。 ・書く内容の情報量が多過ぎないか、確認させる。

このように、児童の振り返りシートの記述内容を基に、次時の初めに行う全体指導の内容を決めたり、次時に取り組むとよいことの助言や取り組み方への励ましを一人一人に伝えたりしながら、ミッションのクリアに向けた指導・支援を進めた。

第９時：単元全体の学習を振り返る

報告文の完成後、自分がどのように学習を進めてきたのか、単元全体の学習の過程を振り返る活動を設定した。「山登りミッションシート」で、ミッションのクリアのために自分が実際に取り組んだことを新しいカードにして付け加えたり、並べ替えたりして、その過程を整理できるようにした。（資料２）



資料２　単元終了時の「山登りミッションシート」

第１時で計画したものと比較させると、どの児童も、取材後の過程についてのカードが増え、本単元の「頑張りどころ」としていた書く内容を選び、報告文を書く過程での自らの粘り強い取組を実感することができていた。

⑺　成果と課題

○　単元全体の学習の見通しがもてるようにする第１時の工夫や、毎時の「ミッションがクリアできそうか」という観点での振り返りは、児童が自らの学習に見通しをもち、粘り強く学習に取り組むことを促す点で有効であった。

●　単元内自由進度学習では、毎時の振り返りを基に、困っていることを記述している児童や進捗状況に遅れが見られる児童を把握し、授業時間内の指導・支援の重点を置いたが、自力で個別に学習を進めていく児童への指導・支援の方法には課題が残った。児童が粘り強く書くことに取り組み、ねらいとする資質・能力を高めることができるよう、その具体的な方法については、今後も引き続き実践を通した検討を進めていきたい。